オンライン意見交換会「大学体育の将来を語る」

並びに自由コメント回答集計の報告

2023 年 11 月 9 日（木）18:00-20:00　　企画：公社）全国大学体育連合将来構想委員会

コンテンツ

１．あいさつ　　葛西順一　（専務理事）

２．趣旨説明 ～ 課題整理と危機感の表明　　村山光義　（将来構想委員長）

安西前会長記念講演、中教審答申「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」を参考に

３．話題提供　　大学体育改善の取り組み　　高橋浩二　（長崎大学）

日本体育・スポーツ・健康学会　応用（領域横断）研究部会　学校保健体育研究部会【課題 A】

「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」より

４．意見交換　大学体育の現場の実情・課題の共有と整理　進行:寺岡英晋（日本体育大学・将来構想委員）

【概要】

本意見交換会は、わが国の大学が少子化や経済的な危機などによって多くの課題に直面する中、大学体育の今後について、喫緊の課題と中長期課題を分析し、大体連及び全国の大学体育関係者に課題内容を共有し、幅広い議論の場を提供する目的で開催した。参加者は 29 名であった。以下に概要をまとめた。

趣旨説明（将来構想委員長：村山）として、本企画の発端ともなった安西祐一郎前大体連会長の 70 周年記念講演から今後の大体連の課題と必要な施策として挙げられた内容を確認するとともに、文部科学省中央教育委審議会答申「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」を参照し、急速にかつ大きく変動する VUCA 時代に求められる高等教育の改革の方向を確認した。

話題提供として、日本体育・スポーツ・健康学会の応用（領域横断）研究部会において 2021 年より 3 年間にわたって検討された「大学体育の授業をいかに良質なものにするか」について、長崎大学の高橋氏より報告をいただいた。学会では、大学体育の質改善に帰する研究発表とともに、シンポジウムにおいて大学体育の現在地を歴史的に振り返り(1 年目)、共生社会の創造に向けた大学体育授業の可能性の検討(2 年目)、大学体育の社会的使命の実現への取り組み（3 年目）の議論を重ねてきた。今後も大学体育の研究推進とともに、体育系学術団体からの提言 2010「21 世紀の高等教育と保健体育・スポーツ」の検証と新たな提案や国際団体との連携、教養も専門も含んだ新たな大学体育の体系化などの必要性を示された。

意見交換セッションでは、オンラインツール（Mentimeter）を利用したアンケートを実施し、集計結果を参考にしながら具体的な事例や課題意識について共有した。意見交換を通じて、参加者の多くが大学体育の改善に強い意識を持って取り組んでいることが感じられた。また、各大学の事情に合わせた取り組みについて貴重な意見交換がなされた。しかしながら、その内容を十分掘り下げるには時間が足りなかった。そこで、本会終了後、より具体的な意見や事例を集約するため、大体連ニュースを通じて「自由コメント回答フォーム」を公開した。この自由回答を含め、今回得られた点を次項で総括する。

【総括】

趣旨説明および話題提供において、大学体育は VUCA 時代、Society5.0、共生社会における大学教育改革の方向性を見定め、大学生の育成や社会の変化に対応する授業内容の改善・開発の研究・実践を早急に進める必要性が示された。これを踏まえて、意見交換セッションと自由回答から現場の意識と取り組みの現状について総括する。

質問１：「大学体育の社会的使命」　＝　**健康増進とスポーツ文化**

「学生の健康増進」が５点満点で 4.5 点と最も高く、**スポーツ実技ばかりでなく**、メンタルヘルスを含めた**健康増進に関する理解と実践を重視すべき**という意見も強かった。一方で、**「スポーツ文化の促進」**も 4.4 点と続き、Physical Literacy、身体の賢さの育成、スポーツ科学などの“知”によるスポーツ・身体運動文化の学術的理解など、体育の学問的価値に通ずる価値観も高かった。これに**「共生社会の創造」**が 3.9 点で続いたが、自由回答では、ライフスキル・コミュニケーション能力の育成、初年次教育や友人形成なども挙げられた。中教審答申では、学生の主体的学びへの変換と社会要請に応じた教育内容の見直しが求められる中、体育の普遍的価値を維持しつつ、**新たな時代に必要とされる体育教育の内容を打ちだしていくための議論**をさらに深める必要がある。

質問２：「大学教養体育として最も重要な課題」　＝　**授業並びに教員の質**

「授業の質の確保」が２番目の**「教員の確保」**の約 2.5 倍多かった。意見交換と自由回答のいずれからも、まず授業の質を確保する重要性が挙げられ、そのために、種目の多様性や教員の採用増員が必要とする一方、**教員の（実技）指導力や意識の低下**を課題として指摘する声も多かった。経営者、所属学部、他分野や事務を含めた評価が低く、教員の補充面に不足が生じている点は教員側にも問題があるということである。この点は、自由回答で求めた「将来へ向けた課題・問題点など」にも重ねて示され、**大学内で認められる授業内容や組織的環境づくりとともに、学内的に宣伝と理解を進める**ことを課題とする意見が多かった。

質問３：「大学体育を良質なものにする取り組み」　＝　**Good Practice の共有として**

参加者の 75%が**「授業デザイン・学習内容の研究」**を挙げ、**「大学体育の目標・指導内容の再構築」**が 65%であった。次いで**「教員の雇用・人材育成」**が 55%であったが、自由回答では教員の全体会議や教員間の教育目標の共有、自身の取り組みの公開なども挙げられ、組織的な取組の事例が示された。そしてより具体的には、教育目標として、初年次教育として展開、キャリア教育やマナー教育の一環として展開することや、授業内の工夫としてノートやワークブック（教科書）の活用や添削の実施、ダイバーシティー＆インクルーシブの促進としてパラアスリートを非常勤講師に招く、など多くの事例が挙げられた。こうした**成功例と言える取り組み（Good Practice）**は、全国の大学においてまだ他にも多く存在すると予想できる。それらを集約して共有することは、各大学での課題検討に大変役立つと考えられる。自由回答からも**「“私たちはこうして上層部や他に理解を得てきました。大学体育授業を実施してもらえませんか？”というような内容で、好事例を紹介し、メソッドを集積し、より高度な問題を解決するための材料にする」**といった提案意見もいただいた。従って、今後もこうした情報取集を続け、定期的に意見交換を行う場を設け、ステップアップしていきたいと考える。

なお、自由回答には上記に紹介しきれない取り組み事例や、様々な観点から今後の検討課題が寄せられた。詳細は、次頁以降の資料を参照いただきたい。

【意見交換会発表スライド資料】

趣旨説明　～ 課題整理と危機感の表明　（村山光義）

https://drive.google.com/file/d/1Aj--pYvqFmPXxaLEP5ULrawDImi12Bzq/view?usp=drive_link

話題提供　大学体育改善の取り組み　（高橋浩二）

https://drive.google.com/file/d/1cbxcITQJbjuu23pmlL8fU0EKAl0x9TE0/view?usp=drive_link

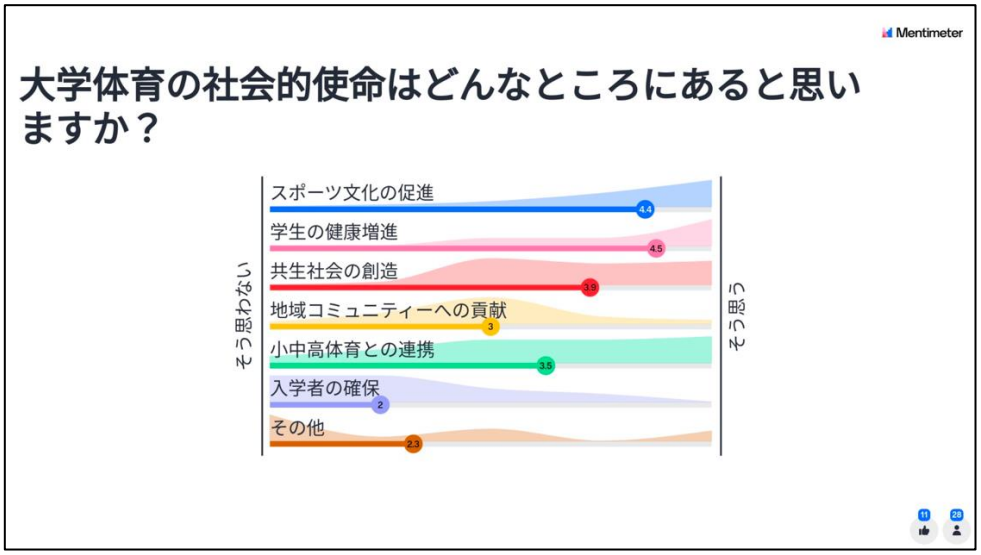
意見交換セッション　まとめ

概要

本意見交換の場では、参加者全員に「参加」してもらうことを意図し、事前に用意した以下の 3 つの質問に対して、オンラインツール（Mentimeter）を利用して、リアルタイムでアンケートを実施・集計した。その後、集計結果を参考にしながら、具体的な事例や課題意識について共有する時間を設けた。

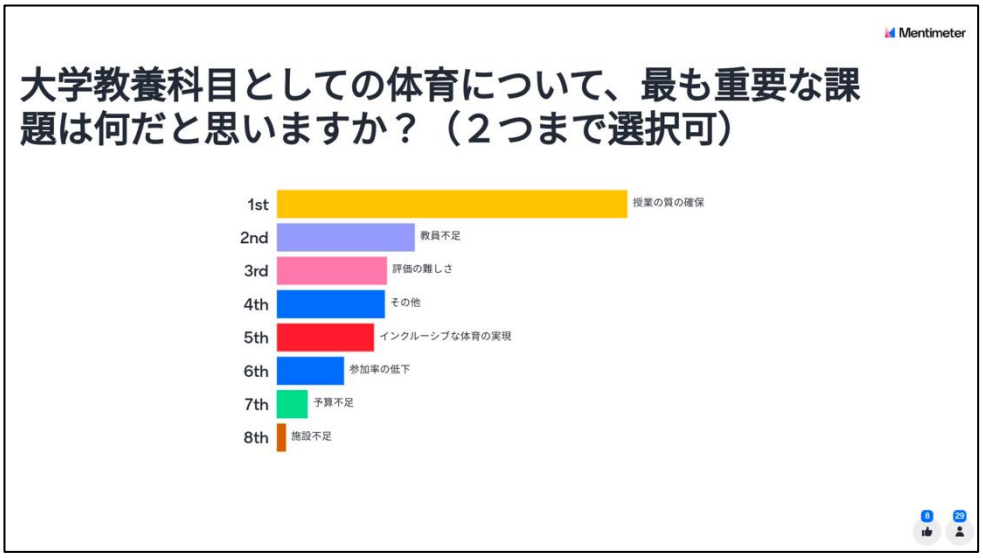
問 1:大学体育の社会的使命

初めに、参加者に問いたかったのは、大学体育の社会的使命について考え方であった。事前に用意した選択肢の中で、「スポーツ文化の促進」と「学生の健康増進」に対して大学体育の使命があると考えている参加者が多かった一方で、「共生社会の創造」、「地域コミュニティーへの貢献」、「小中高体育との連携」については、今後の大学体育を改善していくための重要なキーワードとして、関連学会などで取り上げられているものの、実際の現場での社会的使命感が十分に高くない結果が示された（下図）。また、「その他」の事例については、フィジカルリテラシーを育成すること、学生個人だけではなく仲間や家族にも健康増進の影響を与えていくこと、テクノロジーを活用し健康問題を解決していくこと、などが共有された。



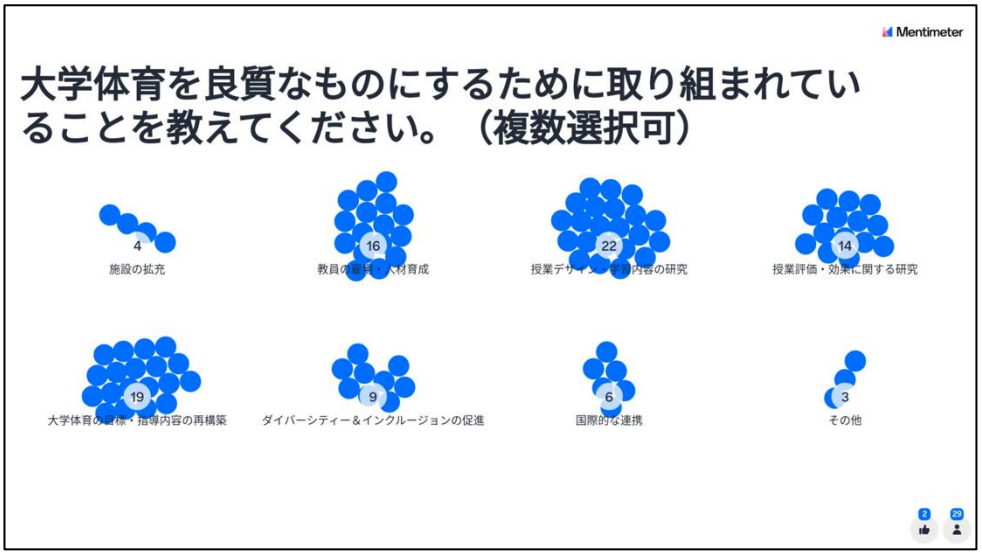
問 2:大学教養科目としての体育の課題

第 2 問目は、大学教養科目としての体育における最も重要な課題について参加者に回答してもらった。現在抱えている課題が多種多様にあることは想像できたが、あえて選択肢を設け、2 つまで回答するという制限を加えた上で、全体的な実態の把握を試みた。結果として、「授業の質の確保」が最も多い回答数となった（下図）。しかしながら、「授業の質の確保」を進めるためには、種目の多様性や教員の採用増員が必要である一方で、大学における体育への評価の低さや予算の制約がリソースの不足を引き起こしているとの現状も共有された。ひとつの解決策としては、外部との連携で協働していく仕組みを構築していくことが示された。とりわけ、「インクルーシブな体育の実現」に関して、当事者である障がい者（パラアスリート）を非常勤講師として招き、授業を展開してもらうことで、より学生の深い学びにつながったという事例も紹介された。



問 3:大学体育を良質なものにするための取り組み

第 3 問目は、日本体育・スポーツ・健康学会の学校保健体育研究部会で設定されていたテーマと連動して、大学体育の質向上に向けた取り組みを複数選択可として回答を得た。結果、回答者数 29 名のうち、22 名が「授業デザイン・学習内容の研究」に取り組んでいることが示された（下図）。授業デザインと関連したその他の取り組みとしては、初年次教育として展開すること、キャリア教育やマナー教育の一環として展開することなどが挙げられ、「教養科目」として位置付けを大学の中で高め、体育の独自性をアピールするための努力が挙げられた。



「大学体育の将来を語る」自由コメント入力フォームへの回答（全データ）

2023 年 11 月 16 日～11 月 30 日

Q1：大学体育の社会的使命はどんなところにあるか、お考え・その理由などをお聞かせください。

※意見交換会では、選択肢への回答として以下のような結果でした（5 点満点での平均点）

学生の健康増進（4.5）、スポーツ文化の促進（4.4）、共生社会の創造（3.9）、小中高体育との連携（3.5）、

地域コミュニティーへの貢献（3.0）、その他（2.3）、入学者の確保（2.0）

・スポーツ実技ばかりではなく、フィットネス教育（健康体力づくりのための理論と実習）を充実させるべきである。

・学生のコミュニケーション能力向上の場

・スポーツ科学の知見を学生に実践の場として伝えていくことおよび広義のスポーツ概念に基づくスポーツへの理解の促進。加えて、スポーツは「平和」を求める先導者であることに社会的使命があることは、従前より一ミリも変化がないと思われる。

・学生の健康増進（健康維持増進）及びスポーツ文化の促進（メジャー・マイナー問わずあらゆるスポーツを経験する場）　健康増進に関しては、身体活動量の確保は重要不可欠であると考える。　また、スポーツ文化の促進に関しては、あらゆるスポーツの体験と実践の場と考える。

・大学生のライフスキル、社会人基礎力の向上

・「学生の健康増進」と同じく、生涯に渡り健康を維持するための知識として、様々な授業を通じて自分を知ること、さらにはライフスキルを醸成すること。

・教養としての体育（最近で言われている physical literacy）を学生に学んでもらい、身体の賢さを育成すること。

広義には学生の健康増進に含まれると思いますが，学生自身が生涯にわたり自分の健康を維持増進していく力を身に付けさせる必要があると思います．したがって，体育実技のみではなく，実技プラス，健康関連の知識や実践力を通じた教育が必要と考えます．

・大学体育は，高校以前の体育とは異なり，身体を動かすことによる健康促進に留まらないと考えています。身体運動の学術的・文化的背景を学ぶことや，自身が生きる社会とどのように関連しているかを学ぶ意義があり，また教員にはそれらを各々の専門分野の視点を通じて教育する使命があると考えます。大学の一科目（特に教養科目）として開講している以上，身体や運動などの体育を通じた「知」に触れることが大事であり，またその「知」が自身の生きる社会とどう関わるのかを学ぶことが学問として重要と考えるからです。

・体育という科目であれば、学生の今（週に 4 メッツ・時確実に運動する）と将来（知識と技術により今後も健康行動実践をする、継続する）の健康増進。また、ここには大学生活の中でのリフレッシュというメンタルヘルスの観点での効果も含まれると思います。　また、初年次教育（大学施設を広く使うことから友人の形成、他者の理解などコミュニケーション、運動や健康という割と身近なテーマを元にした大学での学び方についての練習などに至るまで）。離学者の低減などにも効果があると思いますし、それらを発見、検出するための授業としても重要であると思います。

・参加者と同様、学生の健康増進、またスポーツ文化の促進（醸成）を上位に考えます。また「大学体育」のオリジナルは何かを考えた時、やはり実技であると考えています。

・社会的使命と言えるかどうかは定かではありませんが、学生が大学において各々学問を修めることと同時に、学生同士、あるいは教員とコミュニケーションを取り合うことは、個人の人間形成において重要なことと考えます。大学体育は、そのコミュニケーションを取り合う一つの題材として、あるいは取り合い易い場と考えます。ようするに、体育そのものを学ぶことだけではないと考えています。

Q2:大学教養科目としての体育のもっとも重要な課題は何だと思いますか？お考え･その理由などをお聞かせください。

※意見交換会では、選択肢から 2 つ選択し、以下のような順番でした

1 番．授業の質の確保（2 番の約 2.5 倍）、2 番．教員不足、3 番．評価の難しさ、4 番．その他、5 番．インクルーシブな体育の実現、6 番．参加率の低下、7 番．予算不足、8 番．施設不足

・教員の熱意

・質の確保。スポーツ実技ばかりではなく、トレーニング（フィットネス）実技を増やすべきである。

・教員の実技能力・指導力の低下

・講義と実技の関係を密接にし、人類共通の文化であることを理解させること（無くてはならないものであることを理解させること）

・インクルーシブな体育の実現　　スポーツも多様化していく考えが必要と考えます。　　限られたスポーツのみ実践していくと全体の中でスポーツができない・やりたくないといった学生がある一定数出てしまうと思います。全員が全員楽しくスポーツを行うのは難しいかもしれないですが、苦手意識などを取り除いていく意味で多種多様なスポーツを経験することが重要と思います。

・各大学の教育ポリシーに合致した共通体育部署の教育目標、授業内容の設定と協力体制構築

・我々の組織においては教員不足が最も課題となる。

・**経営者の理解不足**（過去の体験から大学の体育を否定する経営者が多い）

・授業の質を高めるために，教養体育を担う人材の育成が急務であると考えます．　大学の経営側は設置基準や認証評価を気にして，研究業績や教育歴を重視する方向があると思いますが，学生教育を考えた時には学生の立場を理解したり，担当する授業（種目）への精通具合，ティーチングティップスなどが教員に求められると思います．

・大学体育としての授業の確立だと考えます。Q1 と関連しますが，身体運動による健康促進の一面は重要であるものの，大学の科目として存在する意義を受講生のみならず，外部から見ても必要だと思われなければなりません。そのためには，身体運動も含めた「学問としての学び」が得られる授業づくりや授業運営が重要と考えます。

・交換会で感じましたが、この質問には、1 つと回答を断定できないように感じました。授業の質を確保するためには、教員確保も重要ですし、評価も重要です。参加率低下や予算不足、施設不足も直面していればより喫緊の課題です。根本的には、課外活動や民間クラブへの加入とは異なり、なぜ、わざわざ大学教養科目としての体育授業をするのか、という価値や意義を確立することで、不足している重要課題を解決できるよう上層部や周囲などに働きかけることができるように感じています。村山先生が総括されていた体育という本質的な意味や意義を確立する、というところにまで至らずとも（至ることができなくても）、全体の包括的な意味合いとしては授業の質となり、その細目となるのが 2-8 の要素なのではないかと感じました。ここで重要課題を絞り込むことが難しく、また、全て包括しており、意味があるのだろうか、と感じます。　　ただ、敢えて、述べるとしますと、周囲の理解、すなわち、**体育教員が所属している学科・学部及び、学科長、ひいては学長、事務職員に至るまで、体育科目の意義や価値を共有していただける環境や状況を構築できるか**、というのが 1 つの重要な鍵であると考えています。そのためには大学のポリシーに沿っていることも重要ですし、理解を得るための様々な客観的な資料や実践内容、大学への教育貢献を果たしている、果たすことができるというエビデンスが必要になると考えています。こうした知見を集積し、社会的に提示していくこと、各々の所属で提示していくこと、こそ、重要なことなのではないかと感じています。

・参加者と同様「授業の質の確保」が優先されます。質が確保されていないから他分野からの評価が低く、そ

の結果、専任教員の確保（補充）が難しくなっているように感じます。他方、今回、話に合ったように、体育（スポーツ）の教員でありながら、採用時に研究業績を優先するために実技指導ができない教員も少なくなく、体育のオリジナルは自ら捨てている教員（大学））もいる（ある）ように思います。

・もちろん授業の質の確保です。そしてそれを全うする教員の質の確保だと思います。

Q3:大学体育を良質なものにするため取り組まれていることを教えてください。また、その具体的内容などをお聞かせください。

※意見交換会では、選択肢から複数回答し、以下のような回答数でした

授業デザイン・学習内容の研究（22）、大学体育目標・指導内容の再構築（19）、教員の雇用・人材育成（16）、授業評価・効果に関する研究（14）、ダイバーシティ＆インクルージョンの促進（9）、国際的な連携（6）、施設の拡充（4）、その他（3）

・開学以来（30 年目）、一般学生に対してウエイト（筋力）トレーニングの経験と習得に力を入れてきた。

・学生が主体的に考え、動くための授業展開

・ダイバーシティ＆インクルージョンの促進　私自身は体育の授業等には関わっておりませんが、授業担当の教員にフライングディスクを紹介し実践頂いております。（2 回程度）すべてのコマではできないため数回実施頂いたが、学生からまたやりたいという意見もあり来年も実施予定であります。体育学科でもインクルーシブスポーツを実践していきたいと考えているようで科目になる可能性がある。ボッチャやシッティングバレーなど障がい者スポーツなども取り入れ、多種多様なスポーツを経験してもらい、将来的に学生が体育教師となって生徒に多くのスポーツを実践してもらえることができればと考えます。

・非常勤講師も含めた本学体育の教育目標、内容の共有

・専任、非常勤を含めた担当教員による全体会議を年 3 回ほど行っている。

・①大学体育目標・指導内容の再構築

大学の枠組みを越えた目標の構築（幼小中高大までの体系化）

②授業デザイン・学習内容の研究と実践

ユニバーサルスポーツの提供と実践、受講者による授業作り

・自身の体力や生活習慣を振り返りフィードバックする機会をつくること，研修会の開催，　評価方法に関するディスカッション，授業研究，国際的な情報収集など

・教員と学生が双方向に意見交換したり，ノートを用いた省察およびその添削を実施しています。また，自身の取り組む運動やスポーツがどのように社会と関わるか，様々な視点から捉えられるように教材を作ったり，演習に取り組んでいます。

・授業デザインや内容の検討・研究は常に進めています。実技の指導方法をどうするか、というよりは、講義的内容をどうするか、運営をどうするか、という点に主眼を置いています。現在、私たちはワークブックという冊子・教科書を作成し、それを受講者に購入させる形で授業を展開しており、この冊子物を授業で使用することで非常勤を含めた年間 80 コースもの授業の内容を、全体で、実技種目こそ違えど、統一性を保てるような授業設計を目指しております。ダイバーシティや国際的な視点を絡めるなど多少の工夫をしていますが、他の圧倒的な違いは間違いなく、ワークブックと大学体育に対する研究とその知見を授業に盛り込むことで価値を高めるよう努めている点です。

・「授業デザイン・学習内容の研究」や「大学体育目標・指導内容の再構築」をした上で、自身の授業への取り組みを公開したり、他分野との情報共有により体育の価値についての理解を醸成するよう、努力をしているつもりです。

Q4:大学体育の将来に関して、現在の課題や問題点、取り組みなど自由に回答してください。

・各大学の置かれた状況や学生のタイプによって目指すものが違うため、こうあるべき、と大体連を挙げてあまりにも追求しすぎるのはどうかと思う。

・体育教員が定年退職したときに専任教員を補充しないこと（非常勤対応になる）。**体育以外の大学教員が体育教育に対する意識が低過ぎることが問題**（自業自得でもあるが）。

・博士採用の弊害

・「健康」は重要なキーワードであることは変わりないが、「身体を通した教育」に立ち返るとともに、教員側が「専門領域」に縛られるのではなく、人文、社会、自然科学にまたがる幅広い知識を得ること

・本学（地方の私立大学）では、入学してくる学生の質が年々低下していることは言うまでもなく、頭より身体がメインでの入学であるためスポーツが強い大学であります。大学体育は率先して参加する一方で、座学などの身体運動の理論等は学ぶ意欲がほぼ皆無であります。現場での課題は無数に存在しますが、そもそも大学を経営している**上層部の考えが変わらない限り課題解決には至らない現状**と考えております。基本的に資産家の考えが反映される世の中と大学もほぼ変わらないと考えてます。

・2023 年 11 月 9 日（木）にオンライン意見交換「大学体育の将来を語る」に参加させていただきました。私も含めて多くの参加者が今後、具体的にどのようなことを目標にして進めて行ったら良いか、わからない状態と感じました。私としては、全国の共通体育部署の構成員に組織として充実しているかをアンケート調査し、充実していると回答した大学体育部署の環境をベースに今後を検討すべきかと考えております。

・社会に出てからではなく、大学時代に自身の心身を知ることの重要性、これを必修科目として行うことの意義を示すこと。

・体育学会や大体連以外の団体（海外を含む）との連携及び発信が必要

・大学設置基準の大綱化以降，大学体育のあり方が各大学に委ねられたことにより，大学体育教育の価値や意義を経営側に上手く伝えられなかった，上手く伝わらなかった大学ほど苦しい状況にあると思います．特に，地方の大学や女子大学など経営が苦しい大学ほど教員を削減する方向にあり，体育教員に白羽の矢がたっているように思います．一方，都心部の大学においても，従来の実技中心の体育を同じように行うだけでは，時代にマッチしにくくなっているようにも思います．この 30 年ぐらい体育・スポーツに関する多くの研究成果が報告されていますが，体育実技の内容はそれほど大きくは変化していない大学が多いように思います．従来の体育実技の価値を損なわないで，新しい形を作ることが求められているように思います．

・課題という視点ではないのですが，高校体育（場合によっては中学体育も）と大学体育との接続が，今後の大学体育を考えるカギになる可能性（いわゆる高大連携や高大接続という意味でも）があるのではないかと感じています。高校までの体育の実践内容だけでなく，取り組み状況や生徒の雰囲気などを知ることで，それらを経て入学してきた学生（特に 1 年生）に対する効果的な学びの提供も可能になるのではないかと感じています。

・大学が置かれる厳しい経営環境（金・人全て含め）において、その中で、教養体育の授業を必修で確保するためには、他の授業と比較し、経費が必要で、教員も必要で、施設も必要で、社会、大学上層部及び教務課や学生課など広く事務職員に設置の意義を理解していただく必要があると感じます。現在、この点が全国の大学体育の置かれている環境を見ると、十分な理解を頂けていない、あるいはアピールができていない、という点と考えます。この点を促進するため、データに加え、様々な形として、教育内容が学生にとって必要であることを蓄積し、社会、上層部、事務職員に宣伝していかなくてはならないと思います。本学ではそれを長年積み重ねてきたため、1 年半期必修から 1 年通年必修に、必修科目数を 2014 年に増加させることに成功するなど、一定の成果を得ることができました。

・自身の大学では、体育の重要性、価値を評価され、現在まで教養教育の体育教員の補充を減らしたりなくすことなく、人事が進められています。他大学からはやましい状況かもしれないにもかかわらず、教養教育

体育教員の方に「大学体育」の重要性や期待についての自覚がなく、「体育」でない授業を担当しているケースも散見され、今後の大学体育の展開、展望を考えた時に危惧しています。

・現在は大学教養科目としての存在意義を重点に追究していると思われますが、それだけでは十分ではないと思っています。おおよそ人格が固まりつつある学生の個性は様々であり、その個性に良否はありません。いかに自身が自分の個性を把握するか、そして、その活かし方を学び取るか。大学体育あるいは大学スポーツはそれを感じる場であると思います。

Q5:今回の意見交換会における話題提供や意見交換に関する意見・感想、また今後の取り組みや大体連へのご意見などがありましたらご記入ください。

・今後、各大学ともに、留学生の受け入れに一層力を入れると思われる。このことを前提とすれば、諸外国、地域のスポーツ（競技スポーツにとどまらない）についても指導者が情報共有することにより、留学生を含めた授業展開をすることができると思われる

・他の大学で働いている現場などが聞けて良かったと感じます。もっと多くの意見が聞けると、各々で抱えている課題解決の糸口がわかるかもしれないと思いました。　意見交換会が定期的に（例：年 2 回？）あれば参加したいと思います。

・対面での定期的な意見交換会も必要かと感じています。

・今回は事情により参加できませんでした。

・　大学体育と大学体育授業の区切りをどのように考えるか。　大学体育と大学スポーツをどこまで含めて考えるか。　東アジアでは、体育（学）の名称が問題になっている（通称「体育学会」と同じ懸念）

・国，文科省が保健体育科目を教職課程のみ必修に置いている状況なので，大体連として大学に体育を置く価値や意義をブラッシュアップして作成してはいかがかと思います．　一方，教職課程を履修している学生に対して，これから教員になる，教員を目指す学生に対して，実際の中学校や高等学校における体育の課題や問題点を理解した上で，教育できているかという課題もあると思います．

21 世紀の高等教育と保健体育・スポーツ―活気と親しみにあふれるキャンパスと社会を構築するために―　が公表されてから 13 年が経過するので，身体活動基準のように関連するエビデンスを示した上で大学生への体育・スポーツ教育の価値を示せるとよいのかと思います．

また，上記の提言は，競技スポーツ，自主スポーツ活動（サークル），大学体育のうち，大学体育を主に扱っているため，その 3 つを包括して大学が学生を支えるような概念の提示も必要だと思います．尊重，誠意，共生，包摂などの上位概念の提示と共通認識も有用かと思いますが，多くの方々，多様な組織の意見を集約して，平等で開放されたプロセスを経て作成することも必要かと思います．

・非常に重要かつ今やらなければならない取り組みを引き受けてくださり、また、意見を集約しやすい工夫した会を提案くださった村山先生をはじめ、ワーキンググループの皆さまには心から感謝申し上げます。貴重な 1 歩を大学体育という分野が踏み出すことできたのではないかと感じています。　可能ならば、「私たちはこうして上層部や他に理解を得てきました。大学体育授業を実施してもらえませんか？」というようなタイトルや内容で、授業の枠を守った、もしくは必修化を取り戻した、さらには必修化をより増やした、理解をえた、というような事例を集い、どういう対処を取ると良いのか考えることが、まだ、それができていない大学には少しでも好事例になるのではと感じました。またそこでのメソッドを集積し、より高度な問題を解決するための材料にしていければ良いのではと感じました。

・意見交換会に参加することはできませんでしたが、アーカイブで内容を知ることができ、大変ありがたく思います。

・「大学体育」と謳って一括りに議論するのは難しいと感じています。大学毎の理念や目的、規模（学生数、教職員数、施設他）により、異なった取り組み方を考えるべきではないでしょうか。